男爵記念館農機類標本台帳

一般名称: 歩行式ハンドトラクタ	現地の通称:

資料種別: ◉ 製品−実物 ○ 製品−レプリカ ○ 製品−模型 ○ 製品図面 ○ 写真等 ○ 図書掲載 ○ その他

資料種類:
- ☐ 人力用具 ☐ 手押式 ☒ 耕耘用 ☐ 調製用
- ☐ 畜力用具 ☐ 乗用式 ☒ 施肥播種 ☐ 施設類
- ☐ 原動機具 ☒ 牽引式 ☒ 管理用 ☐ 機素
- ☒ トラクタ具 ☐ 定置式 ☐ 収穫用 ☐ その他

管理プレートNo.

台帳No. D012

相手先番号等

統一分類記号

製作者・会社: Minneapolis Beeman Garden Tractor Co.　製造市・国名 USA

製造年_購入年,標本収集年

使用目的・使用方法等

歩行式ハンドトラクタは、作業機を牽引して農作業を行う点では乗用型トラクタと同等であるが、本機は運転者が歩行しつつ運転する構造のため、乗用型に比べて極めて安価で小規模経営でも導入でき、小回りができて多様な用途に利用できる点で有利である。しかし、稲作主体の日本では、これら輸入のハンドトラクタが水田で使えなかったためにほとんど普及せず、第2次大戦後の1950年代になってから、国産の小型軽量のティラーや動力耕耘機が急速に普及して全国の水田が耕耘機で耕されるに至り、1955年頃から日本産の耕耘機が世界を席巻するまで発展した。したがって耕耘機等はハンドトラクタに分類されないから、標本の機種は日本に普及しなかったし、国内で数少ない貴重な標本と言える。

利用経過収集記録意義等

仕様書_解説等

右に全体図

外観特色関連図等

資料の所在: 公開展示室

資料追記事項

資料管理経過

作業メモ追記文

大正時代に輸入されたハンドトラクタには、米国製のビーマン、ユーチリタ、キンケード式があったが、前述の通り日本では普及拡大できなかった。一方、ロータリ耕耘機構を装着したスイス製のシマール式トラクタは、そのままでは稲作に適さなかったが、国内の好事家が改良を進め、1930年代にクランク型やロータリ型の動力耕耘機が完成し、岡山県児島干拓地が耕運機革命の発祥地となった。それが第2次大戦後に急展開して耕耘機時代を生み出している。

農業機械学会北海道支部「農機DB作成委員会編